



親子龍

奉納 殿子ゲシ 野口 菩提夫亡為

香林

香林山 無量寺
機関紙 第4号
発行者 堤 俊海
香林編集委員会
久留米市本町 8-4
TEL0942-32-3010
FAX0942-32-2701

日本語の中の仏教 往生(おうじょう)

「登校の途中、踏切事故で、電車が遅れ、往生したよ」
「高速道路は工事中で、沢山の車が立ち往生しています」
などは日常よく耳にする会話で、このような場合、「往生」は「じつじょう」もなく、困ってほとほと閉口した」という意味です。

しかし、元の意味は全く異なり、読んで字のごとく「往き生まれる」ことである。どこへ往き生まれるのかと、というと、仏さまのいらっしゃる仏国(浄土)を志すのである。つまり、仏教を信仰する人が、死んで生まれ変わる世界への旅立ちをいうわけである。浄土宗や浄土真宗でいえば、阿弥陀仏の本願を信じて、彼の仏の国土である西方浄土へ往き生まれることである。

あなたに贈るラジオ放送番組

浄土宗の時間	
九州毎日放送	日曜日 午前六時三十分より
文化放送	日曜日 午前五時三十五分より
中部日本放送	日曜日 午前六時五分より
毎日放送	日曜日 午前五時三十五分より
東北放送	土曜日 午前五時三十分より

平成七年度法事年回表

一周忌	平成六年に亡くなられた方
三回忌	平成五年に亡くなられた方
七回忌	平成元年、昭和六十四年
十二回忌	昭和五十八年
十七回忌	昭和五十四年
二十五回忌	昭和四十六年
三十三回忌	昭和三十八年
五十回忌	昭和二十一年

念仏講

法然上人の御命日に寺の本堂にてお経をあげ念仏を唱えて上人を忍ぶとともに、お念仏に精進させていただく講中で、浄土宗の寺院では古くから行われています。毎月二十五日午前十一時より
(変更の場合あり)

十四日会

毎月十四日(八月はお休み)午後七時より
本堂にてお経の練習とお念仏の会です。
十四日会は浄土宗開宗の日(三月十四日)と善導大師の御命日(三月十四日)にちなんで行っております。

法然上人のごとば

第五(選択本願)

本願というのは阿弥陀仏の未だ仏にならせ給はざりし昔、法蔵菩薩と申ししいにしえ、仏の国土をきよめ、衆生を成就せんがために、「世自在王如来と申す仏の御前にして、四十八願を、おこし給いし其の中に、一切衆生の往生のために、一つの願をおこし給えり。これを念仏往生の本願と申す也。」即ち無量寿経の上巻にいわく、もしわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂(しんぎょう)して、我が国に生ぜんを欲して、乃至十念せんに、もし生ぜずば、正覺(しょうがく)を取らじと。「善導和尚、この文を釈して、のたまわく、若し我成仏せんに、十方の衆生、我が名号を称すること、下十声に至るまで、若し生ぜずば、正覺を取らじ。」彼の仏、今現に世にましまして成仏し給えり。まさに知るべし、本誓の重願むなしからざること。衆生称念すれば、必ず往生を得と。「念仏といふは、仏の法身を憶念するにもあらず、仏の相好を觀念するにもあらず、ただ心をいたして、専ら、阿弥陀仏の名号を称念する、これを念仏とは申すなり。ゆえに称我名号というなり。」念仏の外の一切の行は、これ弥陀の本願に、あらざるがゆえに、たとひ目出度き行なりといえども、念仏には、およばざるなり。「大方、其の国に生まれんと、おもわんものはその仏の誓いに随うべきなり。されば、弥陀の浄土に、生まれんと、思わんものは、弥陀の誓願に従うべきなり。」

お焼香の意味と作法は？

焼香の意味は亡くなられた方や、諸仏、諸菩薩は「香食身」ともいって、お香はなによりも「ちそう」であり、お供物なのです。そして、その香りは、供える人の身と心を清浄にし、心身のすみずみにまで行き渡るものであることから、すべての人々に差別なく行き渡る「仏の慈悲」をたたえるためのものともいわれています。すなわちお焼香は、私達の真心を捧げる行為にほかならないものなのです。

さて、その作法ですが、抹香の場合の焼香作法を取り上げてみましょう。

お導師から焼香の案内がありましたら、導師に合掌一礼して、焼香台の前に進みます。

焼香台の前で、「ご本尊あるいは遺影をおおぎ、合掌一礼します。」

合掌のとき、数珠を左手首にかけて、右手の親指、人差し指、中指の三本で軽く香をつまみます。

つまんだ香を上に向けながら左手の掌でつけるようにして額あたりにささげます。

香をたきます。

今一度、「ご本尊、遺影をおおぎ、合掌礼拝し、一、二、三歩さがり導師に、葬儀のときは喪主にも一礼して退出します。

以上が基本的な作法ですが、真心をこめて、丁寧かつ敬虔な態度で行うことです。

さて、もう一つ問題があります。それは「の香をたく回数です。一回、二回、三回、いずれでもよいのですが、普通は一回に真心をこめて焼香していただければ結構です。

焼香の回数はいわれ

一回は一心不乱、二回は戒香(教えの香)と定香(静けさの香)をたいて智慧の火で供養するとの意、三回は貪(むさぼり)、瞋(いかり)、癡(おろかさ)の三毒煩惱を焼き尽くし清浄をたもつこと、または仏、法、僧の三宝に供養する意味とされています。



有難いお念仏と私

国崎 静美

今思い返せば、平成五年七月二十日に主人は脳梗塞のため入院の末に他界致しました。

其の後副住職様より今度法然上人様の集いを行いたいのだから、それと誘いのお言葉をかけて下さいました。そして十四日会ときまりました。何だか自信がなくて迷って居りました其の時二人の娘達がこんな大切な有難いお言葉を戴き、此れが貴女の努めでせうかと、勧められて不安乍ら無量寺にお参りに行く事に成りましたところが、今まで仏教の事等何一つ存じませんでした。副住職様の暖かい心のもった御法話を教えて戴き、又お念仏講にもお導き下さり、良き皆様方とも巡りあふ事が出来、自分の心の曇りに気付かせて戴き感謝の心に悟らせて戴く事が出来ました。

これも偏にお住職様と副住職様のお陰でございます。今は朝夕の礼拝に仏前に向かい阿弥陀如来様、善導大師様、法然上人様、御先祖様に毎日新しい命をさづけて下さいましてこの上もない有難い幸福でございます。

又不思議と心が清まり亡き主人との語りひすら出来る様な毎日でございます。心より感謝申し上げます。

今後も浄土宗のおつとめ南無阿弥陀仏のお念仏を自分の心に素直と感謝の気持ち忘れずひたすら終着迄祈りに止みません。

有難うございます。

家族みなでお念仏

井上 重徳

私共親子は四人家族(長男、長女)で、平凡ですが毎日を元気で暮らしておりました。

平成四年十月の末、突然息子が難病に罹り、平成五年九月に二十九才の若さで生涯を閉じ、浄土の国に旅立って行きました。

私も妻も覚悟は致しておりましたが、一人息子を亡くした今、生きてゆく気力もなくなり精神的に落ち込んでおりました。

四十九日の法要の日に、副住職様より十四日会の集まりの事をお聞きし参加させていただくことにしました。

毎月本堂にて皆様方と一緒に経とお念仏を唱えています。早いもので九月で満二年になるとお聞きしました。

この頃ではお念仏のおかげで心の乱れもなくなり不思議と雑念も消え清々しい気分になり息子の供養と家族の日々の健康を感謝し、お参り致しております。

十四日会は副住職様のご法話、写経、お経の解釈、百万遍等、ご指導いただいています。

今後も家族みなで信心を深めていきたいと思っています。法然上人(一枚起請文より)

「極楽浄土に生まれるには南無阿弥陀仏と唱える念仏以外の何ものでもない。念仏を信じよ」とする人はどんなに知識や学問があっても、愚にかえらねばならぬ、愚にかえってひたすらに念仏するがよい」

合掌